











































































天久宮由緒

お宮の創建は成化年間と伝へられる。(高麗、高麗王時代、西暦一、四六五—一、四八七)住吉、船荷村に船荷の翁子が閉居していた。或るとき、夕陽の没する頃、天久野に威儀を正した法師を渡へた美しい女人が山上より下って来るのに出会った。中腰には小羽宮があり、耳から水が滴り出で流れている。翁子が法師に女人が何人なるかを尋ねると、法師曰く、自分は山の神に仕立てられているが、女人は山上の森に住む者であるから分らないと答へた。翁子は不思議に思ひ及をつけていた。あるとき、女人が別家に入る時に、中途で消ゆるを見る。翁子は哭き、事の次第を王の陛下に訴へた。任へ聞いた時の王は感嘆を拭きんと役人に命じて、別家に向つて香を供へたところ、それが自然に燃えたので、井に社殿を造営して祭つた。時に神託あり我は船野地なり、堂上の村社の為には祀はれたり。

かの女人は別家の御子なり、舟野天であるとの神託があった。又かの翁子も御人なり。

堂主は神霊の御座によりて安否を祈ることができようと、神徳を尊んじ御宇安全、皇民皇業の基のため、社殿を建立して祭つたといふ。

昭和十九年の十一月、十文堂の神に社殿を消滅、戦後は御殿形式により、昭和四十七年二月二十二日社殿を建立、奉饗祭行、本土復帰の昭和四十七年五月十五日御祭人となる。同日神社本庁に社格入れ、現地に御宇の御座らしい社殿の遺構と今後の発展を期せんとす。

那覇市山王三丁目一九番地の五
天久宮は在州 電話八六三二一三四〇五

